第2781号 （第三種郵便物認可）

図書新聞 2006 7/8 8面

「本土」と沖縄の「生活の記憶」を掘り起こす

探究の幅は厚く、縦横かつ緻密に論じられている

鈴木貞美

▼マイク・モラスキー著『占領の記憶／記憶の占領――戦後沖縄・日本とアメリカ』鈴木直子訳、3・30刊、四六判四三四頁・本体三二〇〇円・青土社

「記憶という騒音のざわめき」に耳をすませる

アメリカの気鋭の日本文学研究者（一九五六年生まれ）が、第二次大戦後、GHQ支配下の日本とアメリカ軍政下の沖縄（本島）を舞台にとった日本語作品を、縦横かつ緻密に論じる。縦横にとは「本土」と沖縄との支配構造のちがいをふまえ、それぞれの作品の類似と差異とを際立たせながら、小島信夫「アメリカン・スクール」（一九五四―以下一九を略）、大城立裕「カクテル・パーティー」（六七）、東峰夫「オキナワの少年」（七二）、大江健三郎「飼育」（五八）、松本清張「黒地の絵」（五八）、曽野綾子「遠来の客たち」（五四）、野坂昭如「アメリカひじき」（六七）など、よく知られた小説から、これまで顧みられることのなかった作品やカストリ的ノン・フィクションまで積極的に取りあげ、思想文化史上の意味を興味ぶかく論じていることをいう。緻密にとは、ポスト・コロニアル理論やフェミニズム理論に依拠しつつも、理論による安直な裁断に陥らないよう慎重に配慮し、また小説を出来事の織りなすストーリー、語りの方法（ナラティヴ）、作家の思想性の三層に分けて丁寧に分析していることなどである。一九七〇年から延べ十年近く、日本と沖縄に滞在し、資料の探索と考察を重ねてきた探究の幅の厚さは、これまで気づかれなかった見解が細部にも満ちており、感嘆させられる。

そのようにして、「本土」と沖縄における「戦前と戦後の連続性」とそのちがいを、また本土の男性作家たちが一様に、アメリカ支配に対する屈辱感の表現に、自らをレイプされた女性にたとえるような「ナショナル・アレゴリー」を用いるのに対して、沖縄の男性作家たちは本土の記憶に修正を迫るような視点を示し、本土の女性作家たちは、そんな紋切り型のアレゴリーは用いることなく、支配の重層性などに批判の目を向けていることなどを浮き彫りにしてみせる。アメリカ占領下の日本と沖縄の「生活の記憶」を掘り起こし、それらの「衝突しあう多様な記憶という騒音のざわめき」に耳をすませ、「長いことおとなしく奏でられてきた単一の記憶という秩序だった対旋律に、致命的で不可欠な不協和音を高らかに響かせること」（三五二頁）。この企てはみごとに成功している。

本書はシカゴ大学大学院で博士号を取得した論文を増補したもので、原題は「The American Occupation of Japan and Okinawa; Literature and Memory」（日本と沖縄のアメリカの占領―文学と記憶、一九九九）。今日のアメリカの読者に向けて、アメリカが日本と沖縄にいったい何をし、どのような様ざまに屈折した反応を引き起こしたかを明らかにすることと、その検証が目的なのだ。

と書いて、一般紙の書評なら収めるところだが、ここは書評の専門紙なので、もう少しきちんと書いておく。私はこれまで英語圏の論文審査を何回か引き受けてきたが、もし、この論文の審査にあたったとしたら――増補された内容であっても――、細部にとどまらないアドヴァイスをふたつはしたと思う。

そのひとつは文化表象、文芸表現におけるアレゴリー、その戦前と戦後の連続性にかかわる。私は「寓意の爆弾」（八五、『人間の零度、もしくは表現の脱近代』八七）のころから、この問題に関心を寄せてきたが、「ないものねだり」をするのではない。被侵略者を女性に見立てるアレゴリーは「日韓併合」時から日本のジャーナリズムでかなり用いられていた。他方、戦時下、占領下ともに検閲をのがれるため、とりわけ敗戦―占領という事態を書く小説には「ナショナル・アレゴリー」があふれていたが、大岡昇平が自ら『合本 俘虜記』（五二）の全体が占領下日本の寓意だと言ったように、それらは被占領者の男性を蹂躙される女性に事寄せて語るような性にかかわるものばかりではなかった。たとえば連合軍のうちソ連の将校のハウス・キーパーを題材にした安岡章太郎「ガラスの靴」（五一）、湘南の米軍キャンプのバンド・ボーイがオンリーに抱く恋心を書いた山川方夫「その一年」（六一）、朝鮮戦争時、熊本の米軍キャンプで馬の世話をするアルバイト学生が一種の監禁状態から抜け出すまでを書く田久保英夫『深い河』（六九、芥川賞）など、どれも男性一人称の視点で書かれており、性にはかかわるが、アレゴリーはそんなに紋切り型ではない。

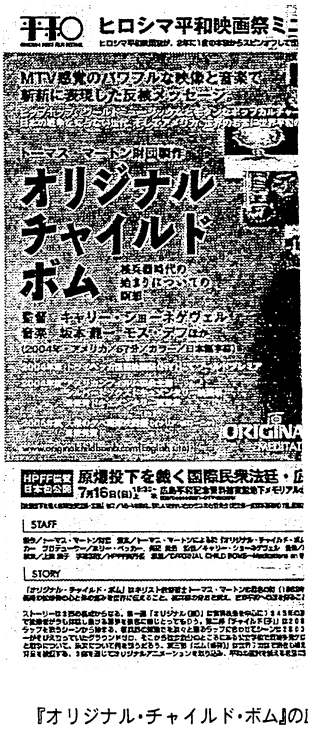
もうひとつ。著者は植民地行政と軍政とのちがいも、ポスト・コロニアル理論が著しい地域的な差異をもっていることやフェミニズムの多様性を十分わきまえているが、それらの理論と同様、支配－被支配の構図（がつくるアンヴィバレントな心情など）に焦点が絞られてしまい、朝鮮戦争以降の米ソ対立とそれが被占領側につくりだす政治的構図が状況や作品の分析を貫いていないことだ。松本清張や中本たか子ら左翼作家の作品に限らず、このスキームは戦前・戦後を通して分析には欠かせない。以上二点、著者がレッスンで覚えた演奏コードから、より自由になるなら、アメリカ占領下の日本と沖縄でかなでられていた不協和音は、倍音も響かせて、いよいよアグレッシヴでスリリングなシーツ・オブ・サウンズとなって流れだすことだろう。

（国際日本文化研究センター教授、日本文芸・文化）

『オリジナル・チャ

メント education + entertainment」なビデオクリップという感じもする。また、（いかにもアメリカ西海岸的に?）ラテン系の名前がスタッフに並んでいるのも嬉しかった。

『原爆の傷跡』（マーク・プティジャン監督、フランス）



『オリジナル・チャイルド・ボム』の